様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３５３０９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2021
課題番号：２０Ｋ２２２０２

研究課題名（和文）吃音者の不安症状および周囲の否定的態度の形成メカニズムの解明

研究課題名（英文）Investigation of the mechanism of anxiety symptoms and negative attitudes among people who stutter

研究代表者
飯村　大智（Iimura, Daichi）

川崎医療福祉大学・リハビリテーション学部・助教

研究者番号：４０８８１８４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題において，非吃音者を対象とした質問紙調査においては，吃音への認識や態度，感情，行動についてCorriganらのスティグマのモデルをベースに吃音においての検証を行った。心理学的要因を吃音の病因と認識している非吃音者においては，生物学的要因を原因と認識している非吃音者よりも，より吃音に対する否定的な感情との関連性を示すことが明らかとなり，吃音への否定的な感情要因の寄与を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
吃音の病因の認識と態度への影響について，海外と同様の知見を尺度の信頼性妥当性も検証した上で明らかにし，吃音者への態度と社会心理学的要因との関連を明らかとし，スティグマのモデルを吃音で応用した点に学術的意義がある。また，吃音の偏見軽減に向けて吃音の正しい理解を促すことが良好な態度形成と関連することが示唆され，スティグマを解消するための今後の社会的啓発を推進するエビデンスとなった点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this research project, a questionnaire survey of people who do not stutter (PWNS) was performed to investigate one’s perceptions, attitudes, feelings, and behaviors toward stuttering based on Corrigan and colleague’s model of stigma in the field of stuttering. It was found that PWNS who perceived psychological factors as the etiology of stuttering showed more negative attitudes toward stuttering than PWNS who perceived biological factors as the etiology of stuttering, indicating the contribution of the negative stereotypes to the attitude of stuttering.

研究分野：吃音・流暢性障害

キーワード：吃音　不安　内受容感覚　態度　印象評価

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

吃音は社会から十分な理解が得られていない。有症率は国や人種を問わず人口の約１％とされる。主なことばの非流暢症状は「音・音節の繰り返し（ぼ，ぼ，ぼくは）」「引き伸ばし（ぼーーくは）」「ブロック（・・・ぼくは）」の 3 種類があるが，社会的に知られている非流暢症状は「繰り返し」が中心であり(Ham, 1990; 飯村，2019; 飯村ら，2017)，成人において問題となりやすい「ブロック」はあまり知られていない。そのため，吃音のない人が一時的に言葉に詰まる状態や「噛む」こととも混同されていると考えられる。

吃音に対して過度に一般化されたステレオタイプ的な認知は吃音への偏見となり，そのような周囲の否定的態度の軽減に向けては，正しい知識の普及が重要とされる。申請者は質問紙調査により吃音の社会的な知識・態度に関する知見を得た(Iimura et al., 2018; Iimura & Miyamoto, 2021)。不正確な吃音の知識は，「私も時々どもることがあるから大丈夫だよ」「吃音は気持ちの問題だから，強い気持ちを持てばどもらない」という誤ったアドバイスやからかい，「吃音のある人は営業職に就くべきではない」などの否定的態度や偏見にもつながる。このような吃音の偏見や学校・職場などでの差別，スティグマ（負の烙印）に関して，その態度形成につながる要因やメカニズムを明らかにする必要がある。

２．研究の目的

吃音のステレオタイプに関する文献では，Wood & Williams（1976）が吃音者と非吃音者の性格特性に関して「開放的な―おだやかな」「怯えている―自信のある」などの 25 対の形容詞の印象評定を SD 法により行い，吃音者に対する強い否定的ステレオタイプを報告しており，この形容詞対を用いた研究知見が近年に至るまで国外で蓄積されている。

さて，個人が信念として認識している特定の疾患の病因（原因帰属）の違いによって，うつ病や統合失調症などにおいて態度が異なるということが指摘されている（Goldstein & Rosselli, 2003; Nieuwsma & Pepper, 2010; Rusch et al. , 2009; Lincoln et al., 2008）。例えば，Goldstein & Rosselli (2003) は，因子分析によってうつ病の病因は生物学的要因，心理的要因，環境要因に分けられることを示した。そして，対象者が病因として生物学的モデルを支持することは，エンパワメントの増加やスティグマの減少と関連することが示された。一方で対象者が病因として心理的モデルを支持することはスティグマの増加と関連することが示されている。

吃音においては，Boyle ら(2009)は，大学生 204 名に対して，吃音の病因として生物学的要因，心理的要因，不明という 3 パターンのいずれかを提示し，Wood & Williams (1976)で用いられた形容詞対で吃音者の印象評定を行ってもらうと，吃音は心理的要因に起因すると伝えられた対象者はより否定的に吃音を評定していることが分かった。Boyle（2016）はさらに，非難，怒り，社会的距離などの尺度から心理的要因による病因と吃音に対する否定的態度との知見をさらに明らかにしている。しかし，尺度の妥当性を確認した上での検討は現在までは行われていない。

本研究ではこれらの背景を踏まえ，吃音のステレオタイプの認知が，吃音の病因（生物学的要因か心理学的要因か）に対する個人の認識と関連するかどうかを検討した。

３．研究の方法

(1)対象

インターネットモニターに登録している日本全国の一般市民から抽出した 413 名の成人（非吃音者）を対象とした。本分析においては吃音の病因に対する認識，すなわち生物学的要因と心理的要因に基づく群比較を目的としているため，吃音の病因について回答をした 276 名から，生物学的要因が吃音の原因と認識していた 80 名と心理学的要因が吃音の原因と認識していた 80 名を無作為に抽出し，さらに健常者の印象について回答した 80 名を無作為に抽出し，240 名の対象者を分析対象としている。なお本研究の実施にあたっては川崎医療福祉大学研究倫理委員会の承認を得た。

(2)質問項目

今回分析対象としたデータは，先行研究（Goldstein & Rosselli, 2003; Linclon et al., 2008; Nieuwsma & Pepper, 2010; de Britto Pereira et al., 2008; Iimura et al., 2018; St. Louis et al., 2011）を参考に吃音の病因について 7 段階で尋ねた 27 問の設問，Wood & Williams (1976)で使用された 25 対の形容詞による SD 法（7 件法）での吃音者および健常者についての印象評定である。

(3)データ分析

対象者の病因の認識について，生物学的要因あるいは心理的要因のどちらで認識しているかで群比較を行うために，対象者のグループ分けを行った。手続きとしては，病因に関する質問項目を因子分析し，生物学的要因と心理的要因の 2 因子構造となるように項目を選択し，それぞれの項目平均値を比較し，項目平均値の高い方を対象者が信念として抱いている病因とした。

次に，SD 法による形容詞対の結果についても因子分析を行い，各対象者の因子ごとの因子得点を算出した。生物学的要因の群，心理的要因の群，統制群（健常者の印象について評定）の 3 群において，因子と群による 2 要因分散分析を行った。また，質問紙の信頼性・妥当性についても検証を行った。

４．研究成果

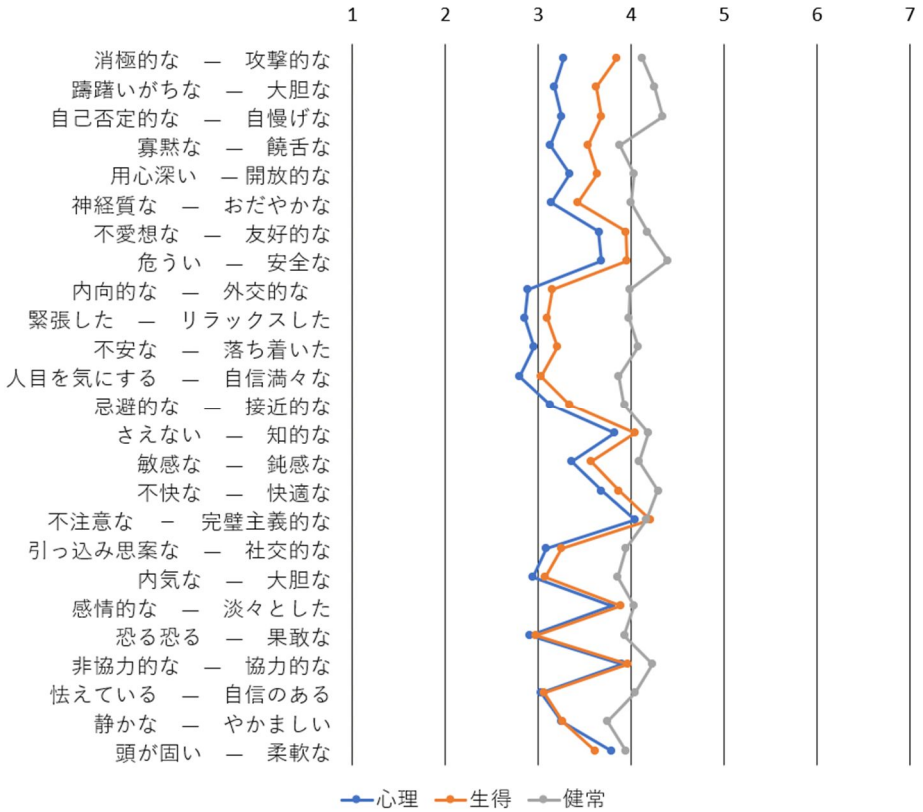
(1)成果の概要

プロマックス回転を用いた最小二乗法による因子分析により，生物学的要因と考えられる 7 項目（例：脳の生物学的な変化）および心理的要因と考えられる 7 項目（例：ストレズ全般）を抽出した。これらの項目に基づき，生物学的要因の項目の平均値が心理的要因の項目の平均値より高かった 80 名が「生物学的要因」群とされた。同様に，153 名が「心理学要因」の群とみなされ，内 80 名が無作為抽出された。両方の項目の平均点が同じ 43 名については以降の分析から除外した。対照群として，いずれのコホートにも含まれない 139 名から 80 名を無作為に抽出した。

この 3 群において，SD 法による形容詞対の平均値を示すと，吃音群（生物学的要因および心理的要因）と対照群の差が大きい項目がいくつかみられ，例えば「緊張した―リラックスした」というペアは，対象者が健常者と比べて吃音者をより「緊張した」と回答している最もステレオタイプな項目であった。同様に，対象者は吃音者をより「不安な」「怯えている」「恐る恐る」「内向的な」「人目を気にする」とみなしていた。一方，「頭が固い―柔軟な」「感情的な―淡々とした」「不注意な―完璧主義的な」などのペアにおいて違いはほとんど見られなかった。

また，「生物学的要因」の群と「心理的要因」の群の得点差が大きいものについて調べると，「消極的な―攻撃的な」のペアは，生物的要因を信念として持つ対象者に比べて，心理的要因を信念として持つ対象者において吃音者をより「攻撃的な」と回答している最もステレオタイプなアイテムであった。同様に，心理的要因を信念として持つ対象者は，吃音者をより「躊躇いがちな」「自己否定的な」「寡黙な」「用心深い」「神経質な」であるとみなしていた。一方で「怯えている―自信のある」「静かな―やかましい」「頭が固い―柔軟な」などのペアにおいて違いはほとんどみられなかった（図 1）。

図 1　病因の違いによる印象評定の結果



これらの SD 法による項目について，プロマックス回転を用いた最小二乗法による因子分析を行うと，Kaiser（1960）の基準では 5 因子構造が見出された。各対象者の因子ごとの因子得点を算出し，3 つの対象者群（吃音（生物学的要因），吃音（心理的要因），統制群）と，5 つの印象条件での 2 要因分散分析を実施した。結果としては，ほとんどの因子において，吃音の心理的要因の群が最も否定的なステレオタイプを認識しており，コントロールが最も肯定的・あるいは中立であり，生物学的要因の群は両群の中間であった。

(2)成果のインパクトと今後の展望

本研究の独創性および主たる知見は以下の点である。

まず，障害への原因帰属による態度への影響は，うつ病や統合失調症などの文脈において研究が進められているが，吃音においても同様に原因帰属によって態度が異なるという点が明らかになった点である。なお，海外においても吃音の原因帰属による研究は行われている（Boyle, 2016; Boyle et al., 2009）。しかしこれらの研究では，吃音の病因を文章で呈示することで明示的に示している。しかし本研究では，調査協力者に病因について選択肢を示すことで回答してもら

っており，因子分析によって得られた因子構造をもとに，生物学的要因と心理的要因の項目を抽出した。そのため，先行研究と比べて調査協力者の潜在的な認識をより反映させたうえで，吃音の原因帰属による態度の違いについて明らかになったと考えられる。また全体的な結果としては，吃音の先行研究（Boyle, 2016; Boyle et al., 2009）とも一貫した結果が得られており，これまでの知見を補強する形で態度研究に寄与できたものと考えられる。

吃音に対するステレオタイプ的な認識は病因の群に関わらず見出され，吃音に対する否定的な認識や態度が社会全般として存在していることが示唆された。しかし一方で，心理的要因を病因と認識している群ではより否定的なステレオタイプが高いことが示された。このことは，吃音の原因帰属の認識が生物学的要因へと変わることで（例：吃音の原因は気持ちの問題ではなく，生まれ持ったものだということ），吃音への良好な態度形成へ繋がる可能性がある。本研究では縦断的な検討は行っていないため，今後は吃音理解の社会的なプログラムや啓発活動による態度の変容を調べることで，吃音理解に向けたプログラムの開発も検討していく。

＜引用文献＞

① Boyle, M. P. The impact of causal attribution on stigmatizing attitudes toward a person who stutters. Journal of Communication Disorders, 60, 2016, 14-26

② Boyle, M. P., Blood, G. W., & Blood, I. M. Effects of perceived causality on perceptions of persons who stutter. Journal of Fluency Disorders, 34(3), 2009, 201-218

③ de Britto Pereira, M. M., Rossi, J. P., & Van Borsel, J. Public awareness and knowledge of stuttering in Rio de Janeiro. Journal of Fluency Disorders, 33(1), 2008, 24-31

④ Goldstein, B., & Rosselli, F. Etiological paradigms of depression: The relationship between perceived causes, empowerment, treatment preferences, and stigma. Journal of Mental Health, 12(6), 2003, 551-563

⑤ Ham, R. E. What is stuttering: Variations and stereotypes. Journal of Fluency Disorders, 15, 1990, 259-273

⑥ 飯村大智、吃音と言語聴覚士の社会的認知に関する検討：国内 3 地点での街頭調査を通して、言語聴覚研究、16(2) 、2019、104-111

⑦ 飯村大智、矢田康人、今泉一哉、吃音に関する知識の実態調査：大学生を対象とした予備的検討、コミュニケーション障害学、34、2017、11-15

⑧ Iimura, D., Yada, Y., Imaizumi, K., Takeuchi, T., Miyawaki, M., & Van Borsel, J. Public awareness and knowledge of stuttering in Japan, Journal of Communication Disorders, 72, 2018, 136-145

⑨ Iimura, D., & Miyamoto, S. Public attitudes toward people who stutter in the workplace: a questionnaire survey of Japanese employees. Journal of Communication Disorders, 89, 2021, 106072

⑩ Lincoln, T. M., Arens, E., Berger, C., & Rief, W. Can antistigma campaigns be improved? A test of the impact of biogenetic vs psychosocial causal explanations on implicit and explicit attitudes to schizophrenia. Schizophrenia Bulletin, 34(5), 2008, 984-994

⑪ Nieuwsma, J. A., & Pepper, C. M. How etiological explanations for depression impact perceptions of stigma, treatment effectiveness, and controllability of depression. Journal of Mental Health, 19(1), 2010, 52-61

⑫ St. Louis, K. The public opinion survey of human attributes-stuttering (POSHA-S): summary framework and empirical comparisons. Journal of Fluency Disorders, 36(4), 2011, 256-261

⑬ Rusch, L. C., Kanter, J. W., & Brondino, M. J. A comparison of contextual and biomedical models of stigma reduction for depression with a nonclinical undergraduate sample. The Journal of Nervous and Mental Disease, 197(2), 2009, 104-110

⑭ Woods, C. L., & Williams, D. E. Traits attributed to stuttering and normally fluent males. Journal of Speech and Hearing research, 19(2), 1976, 267-278

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 飯村大智	４．巻 39
２．論文標題 音児者へのセルフヘルプ的支援の効果を考える：国内外の研究報告を通して	５．発行年 2022年
３．雑誌名 コミュニケーション障害学	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 飯村大智，石田修	４．巻 63
２．論文標題 改訂版エリクソン・コミュニケーション態度尺度（S-24）の日本語話者における標準値の検討	５．発行年 2022年
３．雑誌名 音声言語医学	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Iimura Daichi、Takahashi Saburo、Fukazawa Natsuki、Morita Natsumi、Oe Takuya、Miyamoto Shoko	４．巻 36
２．論文標題 Effect of linguistic factors on the occurrence of stuttering-like disfluency among Japanese-speaking preschool children who stutter	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Clinical Linguistics & Phonetics	６．最初と最後の頁 1～16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/02699206.2021.2001048	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 飯村大智，石田修
２．発表標題 改訂版エリクソン・コミュニケーション態度尺度（S-24）の日本語の標準データの収集と信頼性・妥当性の検討
３．学会等名 第47回日本コミュニケーション障害学会学術講演会
４．発表年 2022年

１．発表者名 飯村大智，石田修
２．発表標題 自助グループへの参加が吃音のある人に与える影響；システマティック・レビューによる検討
３．学会等名 日本吃音・流暢性障害学会第10回大会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関